

苦悩の現場から紡ぎ出された言葉

箕 浦 暁 雄

きみの名は地球の表面から消えてしまつて、——きみという

人間は、まるで生まれたこともないような具合なんだ！

ドストエフスキー 『地下生活者の手記』

一 八月六日に仏教学について語る

こんにちは。仏教学科の箕浦です。大谷大学文学部仏教学科に入学されました皆さんは、同時に大谷大学仏教学会の学生会員になられるということになっております。本日の講演会は、そうした皆さん新入会員の方々に対する歓迎の意を表して開催するものです。大谷大学で学び始めた皆さんに、仏教学という学問分野において私が大切にしたいと考えていることについて申し上げてみたいと思います。

本日、八月六日は、御承知の通り広島に原子爆弾が投下された日です。一九四五年八月六日の朝、世界で初めて原

子爆弾が戦争で実際に使用されました。今から七十五年前のことです。新型コロナウイルス流行の影響で今年度は年度初めに新入会員歓迎講演を開催することができませんでした。まだ流行はおさまっておりませんし、先の見通しも立ちませんので、夏期休暇前のこの時期にオンラインで行うことに致しました。八月六日に開催することになりました。戦争そして八月六日の広島については特別の思いがありますので、そのことを念頭において皆さんとこの時間を共有しようと思っております。⁽¹⁾何卒よろしくお願い致します。

二 名前が失われてはならない

では、まずはプーリモ・レーヴィ(二九一九―一九八七年)の詩を御紹介することから始めます。プーリモ・レーヴィはイタリア出身の作家です。若い頃に化学を専攻したようです。アウシュヴィッツ強制収容所の生還者であり、その体験を記した作品を残しています。ここに御紹介するのは一九四七年に刊行された『これが人間か』という作品に収められた詩です。

これが人間か、考えてほしい

泥にまみれて働き

平安を知らず

パンのかけらを争い

他人がうなずくだけで死に追いやられるものが。

これが女か、考えてほしい

髪は刈られ、名はなく

思い出す力も失せ

目は虚ろ、体の芯は

冬の蛙のように冷えきっているものが。

(ブリーモ・レーヴィ『これが人間か』三―四頁)⁽²⁾

こうしたものが人間と言えらるだろうかという悲しくそして厳しい問いかけがここにあります。また、次のように語っています。

自分のものはもう何一つない。服や靴は奪われ、髪は刈られてしまった。話しかけても聞いてくれないし、耳を傾けても、私たちの言葉が分からないだろう。名前も取り上げられてしまうはずだ。もし名前を残したいなら、そうする力を自分の中に見つけなければならぬ。名前のあとに、まだ自分である何かを、自分であった何かを、残すようにしなければならない。

(同二七頁)

だが、無名の死がやって来る前に、もう心は死んでいるのだ。私たちはもう帰れない。ここから外に出られるものはだれ一人としていない。なぜなら一人でも外に出たら、人間が魂を持っているにもかかわらず、アウシュヴィッツでは、少しも人間らしい振る舞いができなかつたという、ひどく悪い知らせが、肉に刻印された入れ墨とともに、外の世界に持ち出されてしまうからだ。

(同六七頁)

こうした言葉を念頭において、ここでさらに、一九四五年に満州で終戦を迎えたのち八年間ものあいだシベリア強制収容所に抑留されたにもかかわらず生還した石原吉郎(一九一五―一九七七年)が残した興味深い発言を御紹介して

おきましよう⁽³⁾。強制収容所という場所はきわめて異常であるにもかかわらず、囚人たちは異常な事態を終には退屈とさえ感じるようになる。人は周囲に対して同じ反応をして同じ発想で行動し始める。こうして囚人たちは「平均化」され、自分の名前が徐々に風化し、いつでも番号に置きかえうる状態になってしまう。もはや「単独な存在である」とを否応なく「断念」させられる。ただし、この「平均化」は、囚人自身が望んで招いた状態でもあったのです。強制収容所で生きのびるためには、集団のなかへ自分を埋没させなければならなかった。石原吉郎はこのように語っています。

このような状況のもとで、死に際して最後に人間に残されるのは、私が「まぎれもなくここに存在した」ことを他者に確認させたいという希求であったと言います。誰かに自らの存在を確認させる手段がもはや名前以外に何も残されていなければ、人は自らの名前にすべてを賭け、名前を残そうとした。人間にはどこまでも根強い承認要求があり、それが同時に人間の存在を確かめる根拠でもあった。だからこそ、何もかもが奪われ名前しか残っていないという事実ほど恐ろしいことはない。石原吉郎はこのように言及しています⁽⁴⁾。

一方、私たちは、戦争における死者の数に恐れおののき、それに圧倒されてしまいます。しかし、数量の多さとして恐怖を理解するならば、即座に大切な視点が欠落すると石原は指摘します。「大量殺戮^{ジュノサイド}のもつとも大きな罪は、そのなかの一人の重みを抹殺したことにある。そしてその罪は、ジェノサイドを告発する側も、まったく同じ次元で犯しているのである。戦争のもつとも大きな罪は、一人の運命にたいする罪である⁽⁵⁾」と言います。この指摘はとても重要なものだと考えています。石原が徹底してこだわったのは「一人の死を置き去りにしないこと」です。だから、石原吉郎は、「無名の兵士」という墓標ではいけないんだと言っています。そこにひとりの人の生きた事実が決定的に欠落してしまっている。無名のままではいけないと言うのです。

ところで、私は二〇一七年十二月七日・八日に東本願寺沖繩別院が主催する成道会という法要に招かれて行ってま

いました。釈尊最初の説法の地であるインドのサルナートの菩提樹から分けられたものが二〇〇四年五月に沖繩糸満市の沖繩菩提樹苑に植樹されたのを機に毎年十二月八日に成道会が営まれ始めたと聞いております。御承知の通り、沖繩の那覇にある平和の礎には多くの戦没者の名前が刻まれております。沖繩を訪れた時、その刻まれた戦没者の名を眺めながら東本願寺沖繩別院の長谷暢氏が、戦争で村が全滅するなどして亡くなった人の名前すらわからなくなってしまっている場合があるという状況について語ってくださいました。名前というものはひとりの人間がこの世界に生きていることを象徴するものだと言うならば、戦争はひとりひとりの名前をきわめて軽いものとして扱ってきたと言ってもよいと思います。だからこそ、刻まれた名前をさすりながら涙する人たちの姿は、人間性を回復しようとする願いそのものです。しかも、沖繩の人たちが、とりわけ〈慰霊〉⁽⁶⁾という言葉を用いてそれを大切にしてきたこと、二度と過去のような戦争を繰り返してはならないと主張してきたことは、ひとりの人間としてもういちど圧倒的な暴力の勢いに抗して人間の存在の重みを取り戻そうとすることに他なりません。戦争で亡くなった人の遺骨収集、墓標に名を刻むこと、そして慰霊、こうしたことは死を置き去りにしないという態度表明です。慰霊としか表現するすべがなかった人たちの苦しみがここにあると言わなければなりません。ですから、慰霊ということが、何よりもひとりの死を置き去りにしないという態度表明であるというかぎり、それは存在の重みを抹殺された人たちを再び取り戻そうとする行為であると言えることができるだろうと思います。

三 仏陀の意味が明らかになり、人間であることの意味が明らかになる

いまここで話題にしている戦争に引き寄せて言えば、石原吉郎の言葉を借りて「大量殺戮への途が発見されたとき、ただ一人の人間へ到る途も発見されたはずだ⁽⁷⁾」ということが確認されなければならないと考えております。戦争によるきわめて不条理な死に直面して、自分の拠り所としてきたものが崩れてしまった人たち、何をも信頼できなくなっ

人たちは、もはや生きる喜びを失ってしまった人たち、未来が閉ざされてしまった人たち、こうした人たちがそれでもなおこの世界に生まれてきたことを喜ぶことができるかどうか問うてみなければならぬと思います。そこで、仏教学というのは、こうした苦悩の現場から聞こえてきた声を聞くことから出発したらよいのだと考えています。

仏教は何を問うものであって、どういう問題意識から立ち上がってくるものなのかを何度でも確かめながら学ぶ必要があると考えています。私たちは仏教を学ぶ時に、仏教では老病死の苦悩という表現を持って語り始めることに注目しておかなければなりません。ゴータマという一介の青年は、老病死によって自分自身のあり方が根こそぎ揺らいでしまう。老病死という苦しみを前にしたとき、生まれてきたことさえも喜べず、誕生をも苦しみと言うほかなくなってしまう。しかし、老病死を苦しみと言う必要のない生き方が発見できるなら、この世界に生まれてきたことを喜んで生きることができるとは思えない。老病死を超えて生きることができると発見したゴータマ青年は目覚めた者 (Buddha 仏陀) と呼ばれるようになります。思想研究としての仏教学という学問はゴータマという一介の青年が仏陀と成ったことの意味を探求するものと言えます。仏陀という名前で呼ばれることの意味を明らかにするということを通して、人間であることの意味もまた明らかになると言っておいてもよいでしょう。

四 アングリマラー経に学ぶ

釈尊の入滅後、やがて経 (skt: sūtra / pāli: sutta) というものが編纂されていきます。今日は、ある初期の仏教経典を御紹介したいと思います。アングリマラー・スッタという経典です。皆さんのなかには、初期経典のなかに登場するアングリマラーの物語を御存知の方がおられるのではないのでしょうか。アングリマラーとは、指の首飾りを持つ者という意味です。その男は殺人鬼で次から次へと人を殺し、殺した人の指を切って首飾りをつくったと言います。ですから、アングリマラーとはその経典に登場する人物の固有の名前ですが、世間でそのように呼ばれた者だったとい

うことです。

アングリマールと呼ばれる殺人鬼は村や町をさびれさせるほど人を殺し、世間から恐れられた人物だったと経典は伝えています。そのような人物が仏陀に出会って、殺人をやめ、仏陀に付き従って生活するようになります。しかし、仏道を歩み始めたといっても、苦悩から解放されない。苦しみの只中にあるままです。そんなときに、難産で苦しんでいる女性の姿を見ます。その姿を通して、人間というものが苦悩する存在であることにあらためて気がついていきます。他者の姿を通して、自分自身の姿に出会い直していると言ってもよいと思います。

この経典の最後にはアングリマールが詠んだ詩が記されております。アングリマールの物語は仏教に触れてこられた人にはよく知られた物語かもしれませんが、私が思うに、この最後の詩にこそ、この経典の重要な理念が表現されていると考えています。その一部を御紹介致します。

私の敵たちは、法説を聞くがよい。私の敵たちは、仏陀の教えのもとに努めるがよい。

私の敵たちは、その人たちに親しむがよい。まさに法を授ける善き人たちに。

私の敵たちは、忍辱を説く者たちや敵対なきことを讃える者たちの

法を時に応じて聞くがよい。そしてそれを遵守するがよい。

(アングリマール経【中部経典】⁽⁸⁾)

加害者と被害者という図式を用いるなら、アングリマールが殺してきた人たちとその周囲の人たちは被害者です。被害者たちとアングリマールは、敵対関係にあるということになります。この経典の註釈書によると「私の敵」とはアングリマールを憎んでいる被害者周囲の人たちです。その人たちに向けて釈尊の教えを聞きなさいと、加害者であるアングリマールが語っていることになります。

こうした表現は、この經典のなかに盛り込まれている極めて重要な理念だと申しました。加害者が被害者に向かつて釈尊の教えを聞きなさいと言うのですから、一見きわめて傲慢な態度に見えるのではないのでしょうか。しかし、この經典を編んだ者が世間の常識を欠いた、著しく配慮にかけた、人たちであったと私は考えておりません。人間というものは、いつなんどき相手の生命を侵犯するかわからない存在であるということをも十分確認していて、それを大前提として確認したうえで、この經典はそのことについて一切言及しないのだと思います。ただただ仏陀の教えを聞けというわけです。ですから、相互に生命の侵犯者である、本来孤独である人間どうしが、一緒に釈尊が語る〈教え dhamma を聞く〉という、そのことだけで〈共に生きる〉ことを主張しようとしているように思います。すなわち仏陀が示してくれたとつても大切なことを受けとめることができる〈同じひとつの心〉を持っているというその一点において、〈共に生きる〉ことができる。このように經典を編纂し伝承してきた者たちは考えているはずです。逆に言えば、その一点しか言及しないのです。では、この「教え dhamma を聞け」というときの「教え」とは何か。パーリ語で書かれたこの經典の註釈書を読みますと、これは四諦 (catu-sacca) であると記されています。この四諦というのは、四つの真実という意味です。

- (1) 人間にとつて〈苦しみということ〉が真実である
- (2) 人間にとつて〈苦しみが起こること〉もまた真実である
- (3) 人間にとつて〈苦しみが消滅すること〉が必ずあるということもまた真実である
- (4) 人間にとつて〈苦しみを超えて生きる道が確かにあるということ〉もまた真実である

四つの真実と呼ぶこのことは、仏教の伝承のなかでは、まずどこに出てくるかといえますと釈尊が覺りを開かれて

最初の説法、仏教徒たちが初転法輪と呼んできたところに出てきます。覚りを開いて仏陀と成ったゴータマ青年は最初にこういう教えを語ったというかたちで、初転法輪⁽⁹⁾という教説が残されてきました。初転法輪とは、最初に法の輪を転がしたという表現です。その最初に語った内容の核心がこれが人間にとつての真実だということです。古代インド世界のなかで、暴力で人々を導くときに用いる暴力の象徴としての戦車の車輪を転がすのではなく、法の輪を転がしたという表現です。それが仏陀のなしたことです。暴力を行使するのではなく、真実としての法(Dharma)を説くという理念はアングリマール経を編纂した人たちにもきちんと受け継がれています。そしてこのアングリマール経のなかでは、アングリマールがそのことを詩の一節として語ります。

ある者たちは、杖をもって鉤をもって鞭をもって調御する。

杖や剣をもちいない、私はそのようなお方によつて調伏されている。

(アングリマール経『中部経典』⁽¹⁰⁾)

アングリマールがこのように詠んでいるのです。ここに、暴力で人を導くのではなく、法によつて人を導くという理念が埋め込まれていると考えるとよいでしょう。

自分が殺してきた人たちの周囲にいて私を憎む人たち、つまり私の敵たちに対して、仏陀が語る真実を聞きなさいと言ったわけです。これはまずもつて殺人鬼アングリマール自身が受けとめた(人間は苦悩する存在である)ということに他ならないのです。このことを私が殺した人たちの親族の方々、被害者もまた聞きなさいよ、ということですが、私は説明のために、加害者・被害者という言葉を使いましたが、この経典は一切加害者・被害者という言葉を使いませんし、そのような立場を分ける語り方をしません。この経典の物語世界ではアングリマールという存在は、極めて特異で私たちとは異なる者のことを言っているように見えるかもしれませんが、人間という存在はいつなんどき人を

傷つけてしまうかもしれない、そういう存在の象徴としてきわめて極端に描き出されている人物であると言つてよいと思います。そしてそういう人間の、すなわちただひたすら殺人鬼アングリマーラの心のみを問題にする経典なのです。この経典のこうした語り方は、意図的であつて、実に綿密に練り上げられたものであるように思います。そして、
さらに、

かつて殺害者であつた私の名前は殺害しない者という。

いまや私はふさわしい名前を持つ者であり、いかなる者も殺害しない。
(アングリマーラ経【中部経典】⁽¹⁾)

と語っています。かつて多くの人を傷つけてきたけれどもいまや「殺害しない者」というふさわしい名前 (socca-nama) を得たと表現しているのです。

五 名前を取り戻す

先に紹介した石原吉郎の指摘に戻りましょう。ひとりひとりが固有の名前で呼ばれなければならない。人間を番号に置きかえてはならない。人間であることが絶対に抹殺されてはならない。人間であることを抹殺する行為を容認してはならない。しかし、同時に、固有の名前を持つということが人間存在の象徴であると考えらるなら、固有の名前を持つ存在者とはまぎれもなく苦悩を受けとめて生きざるをえない存在であります。

名前というのは何もかもはぎ取られていく私たちにとって最後の砦のようなものだと言います。それを執着の側から言いますと、初期の経典にあるように、名前を付けその名前と呼ぶという行為は、人間があらゆるものに固執する姿そのものであるということになります。名前を付けるということは、それに固有性を認め大切にすること

とですけれども、それは同時に、固執することが何らかの苦悩の原因にもなります。ですから、例えば、このように経典は言います。

名前はすべてに打ち勝ち、名前以上のものは存在しない

名前という一つのダンマに、すべてが従属した。

(〔相応部経典〕⁽¹²⁾)

仏陀という名前によって、固有の名前が照らし出されなければならないと私は考えています。固有の名前を認め人間の尊厳が守られなければならないのですが、それと同時に仏陀と同じ心を持つて歩むことができる存在であることがどこかで確かめられなければならない、人間はいつでもただただ苦しみの原因となるような固執することのみに陥っています。だから逆に、仏陀という名前の意味が明らかになることを迂回して、固有の名前を持つ者が必ずや仏陀と同じ心で歩んでいけるということが確かめられねばならないと考えています。そういう人たちの未来を奪うことを簡単に容認してはならないとも考えています。

戦争で亡くなつていったひとたちを決して番号に置きかえない。無名の者にしてしまつてはいけない。先にお話した沖繩の人たちの慰霊という思いはこの点を一心に思う気持ちでしょう。無名の者の人間性を回復させる。亡くなつた場所が知れず、遺骨が戻らず、せめて何か持ち物の一部でも戻らないかと思う心、遺品もなくせめてもと刻まれた名前にすぎる人たちの姿、戦場に刻まれた名前を探して涙する人たちの姿、このように悲しみそして苦しみの心を抱いて生きていく姿こそ、気がつかぬまでも仏陀に出会つた者として生きるその出発点にしていることを考へております。仏教の経典のなかには、仏陀の教えに従つて歩むことを決めた人たちの姿がいくつも描かれています。それは仏陀と同じ心をもつて歩み始めようとした人たちと言つてよいでしょう。

老病死は私たちからあらゆるものを順番にはぎとっていつてしまふ。そういう意味で最大の苦悩です。その老病死を愁い厭うだけであるなら、自分の生涯が疑いに満ち、生まれてきたことをもはや喜ぶことができなくなったことになつてしまいます。この世界に生まれてきたことを心から喜ぶことができるように、実はすでに私たちの手元にあるはずの仏陀という名前を私たち自身が取り戻す必要があります。老病死によつて揺らいでしまい、自分の人生に対する疑いのなかで生きる、ということではないような歩み方がかならずあるはずです。

別の言い方をするなら、仏陀という名前がありありと心のなかに浮かび上がる瞬間に、執着を超え、苦悩を超えたうえで、戦争で亡くなつていった人たちとも共に自分という存在の重さをこの手に握りしめて生きていくことができるのではないのでしょうか。ゴータマという一介の青年が仏陀に成つたこと、すなわち成道とはこのようなことを私たちに教えてくれると思ひます。

六 苦悩の現場から紡ぎ出されて

先に紹介したアングリマール経は互いに侵犯しあう者であれ、へ人間は苦悩する存在である」との自覚から出発して、もはや争う必要のない世界に生きることができる。これは我慢して努力して争わないようにするということではなく、おのずともはや争う理由のない世界に生きることができるということです。そのように生きたいと願う同じひとつの心を持つて〈共に生きる〉ことができる」と明確に示しているように思ひます。このような意味で、古代インドの仏教徒たちは何度でも〈他者と出会い直す可能性〉を見定めていたと私は考えています。

今日なお世界中で紛争が絶えません。ここで苦悩の現場と表現したのは、戦場などの特別の場所だけを指しているのではなく、生きるうえで直面する苦悩の経験そのものを指して表現したつもりです。後に仏陀と呼ばれるようになるゴータマ青年の歩みの出発点に、人間は苦悩する存在であるとの認識があつたことを確認するなら、まずもつて仏

陀の教説が収められている初期の經典とは、苦悩の現場から紡ぎ出された言葉が編み上げられて伝承されてきたものであると言ってもよいでしょう。皆さんと一緒に様々な苦悩の経験を語る声を聞き、そこから釈尊の問いの意味を学んでゆきたいと考えています。ご清聴ありがとうございます。

※本稿は、二〇二〇年八月六日に開催された大谷大学仏教学会新入会員歓迎講演の筆録である。講演内容についての大幅な修正は行っていないが、読者諸氏に便宜をはかり、原典とその出典を明記し、また註を加えるなどの加筆をした。また、この講演内容は、一部を除きおおよそ二〇一七年十二月七日に東本願寺沖繩別院主催の成道会における記念講演（仏陀と戦没者——刻まれた名前の意味を尋ねて）に基づいている。関係各位に謝意を表す。

註

- (1) この講演のなかで後に触れるが、我々はどうしたら未来に向かっていくことができるだろうかということを考えるにあたり、原民喜の作品から多くの刺激を得てきた。例えば、原民喜『破滅の序曲』『定本 原民喜全集』I（青土社、一九七八年）参照のこと。
- (2) プリーモ・レーヴィ『これが人間か』（改訂完全版 アウシュヴィッツは終わらない）（竹山博英訳、朝日新聞出版、二〇一七年）
- (3) 主に、石原吉郎「確認されない死のなかで」〈日常への強制〉、「詩と信仰と断念と」〈断念の海から〉『石原吉郎全集』II（花神社、一九八〇年）参照。なお、石原吉郎の言葉については、かつて紹介したことがある。『大谷大学伝導掲示板 きょうのことば』6（大谷大学、二〇一八年）六七―六八頁参照のこと。
- (4) 石原吉郎は収容所の壁のあちこちに名前が刻まれていることを語っている。石原吉郎「詩と信仰と断念と」参照。また、加藤周一『抵抗の文学』（岩波書店、一九五一年）四六―四七頁参照のこと。
- (5) 石原吉郎「強制された日常から」前掲書六五頁。
- (6) 慰霊という言葉について、霊とは何か、慰めるとは何かを問わざるをえないが、ひとまずここでは慰霊という表現の背景

にある苦悩を考えておきたい。また、慰霊という言葉にいかなる願いを込めて用いるのかということを考えておきたい。他方、平和の礎について「塔に刻まれた、たった一行の名前だけが、その人がこの世に生を享けたことを示す唯一の証というケースも少なからずありました」と語られている。太田昌秀『死者たちは、いまだ眠れず——「慰霊」の意味を問う』（新泉社、二〇〇六年）一八四頁。

(7) 石原吉郎「一九六三年以降のノートから」〈日常への強制〉前掲書一五六頁。

(8) *Angulimālasutta, Majjhima-nikāya* vol. I, pp. 104-105

disā hi me dhammakathañ sunantu, disā hi me yuñjantu buddhasāne.

disā hi me te manusse bhajantu ye dhamman ev' ādapayanti santo.

disā hi me khantivādānaṃ avirodhappasamsināṃ

sunantu dhammaṃ kalena taṃ ca anuvīdhīyantu.

(9) *Samyutta-nikāya* vol. V, pp. 420-424 の他『Mahāvagga (*Vinaya-piṭaka* vol. I) 所収のものなど、いくつかの伝承がある。

現存する文献については、水野弘元『転法輪経』について「『仏教研究』一、一九七〇年」〈仏教文献研究〉水野弘元著作選集1（春秋社、一九九六年）再録、経名等については『原始仏典Ⅱ 相應部經典 第六卷』（春秋社、二〇一四年）七〇六頁注(21)を参照するところ。

(10) *Angulimālasutta, Majjhima-nikāya* vol. I, PTS, p. 105

dāṇḍe eke damayanū ankuṣehi kasaṇhi ca.

adaṇḍena asatthena ahaṃ danto 'rhi tādhā.

(11) *Angulimālasutta, Majjhima-nikāya* vol. I, PTS, p. 105

ahimsako ti me nāmaṃ himsakassa pure sato.

ajāhaṃ saccanāmo 'rhi, na naṃ himsāmi kaṇci naṃ.

(12) *Sagāthā-vagga, Samyutta-nikāya* Part I, PTS, p. 39

nāmaṃ sabbaṃ, addhabhavi, nāma bhīryo na vijjati,

nāmassa ekadhammassa, sabbe va vasam anvagū ti.

『大正新脩大藏經』第二卷 (No. 99) 雜阿含經卷第三十六 第1020經 26a.24-25

名者映世間 名者世無上

唯有一名法 能制御世間